

春の装ひ

近藤蕉雨

世界各國を通じて我國と支那位新年を喜び迎へる土地は他に其比を見ないさうだが、衣裳と装飾品に就て制裁のない今日では、各自競つて美服を纏ひ、時好の装飾品を求めて、其妍を闘はすので社會の流行は其年の一月に起るなど



附屬たる懷中時計、鎖、帶留の類をも記すのである

と歴訪する
吳服店を
下屈して都
依つて例に
柄、節に
圖、時節
は、普及を
して、活動
に、其心を
商店が既に
して居る

(一) 三越呉服店

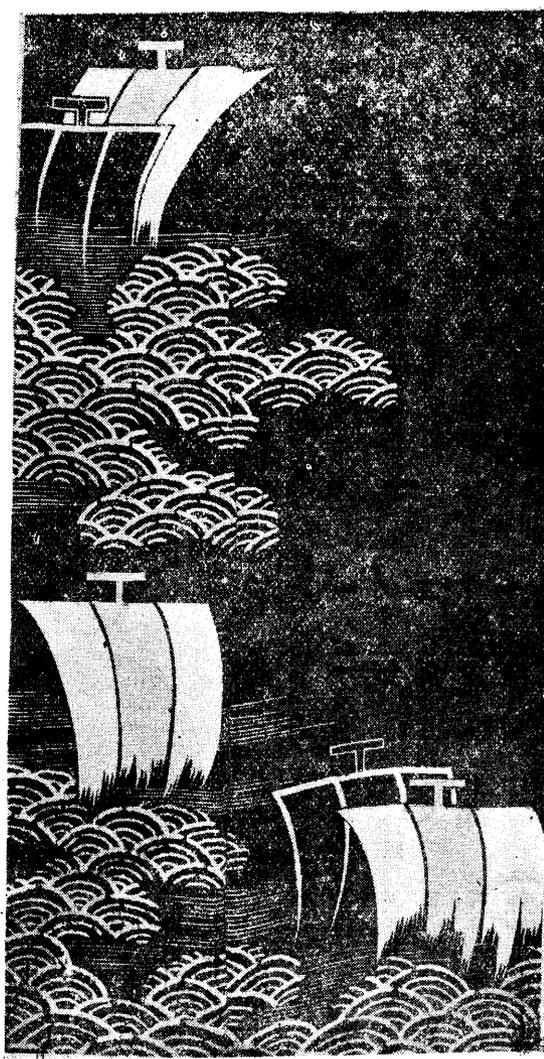
(其一)

●春の衣裳 (日本橋駿河町三越呉服店)
▲色合と模様 今年の流行色は昨年と同じやうに藤色系統と鼠色系統であるが、就中桔梗藤とか桔梗紫とか云つ

まいか。次は模様であるが、是も猶且一昨年と同じ有職風のものゝ勢力を占て居る。裾模様のみではなく帯でも友禪でも左様だが唯昨年と趣きの異なるのは

(二) 三越呉服店調製友禪裾模様(其二)

たやうな藍氣を帯びたものが一般に好まれて居るが、二十歳以上は鼠色向に、鼠色が持離されて居る。是は一昨年頃から引續いての流行色であるが、今年鼠色は底に茶味のあるもので、昨年とも稍異つて来た變り色で、其註文の殊多いのは、或は子年と云ふ所ではある



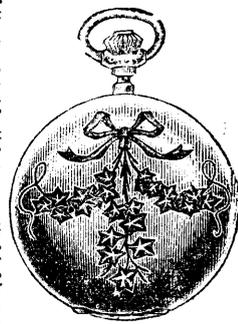
に草花や古代風、動物などが配置されてあるのだ。(一)乃至(二)に示せるは友禪裾模様で、一は濃藍紫色縮緬へ猫柳に加留多、次は紫縮緬に青海波に帆

第拾八卷 第一號

●婦人持懐中時計

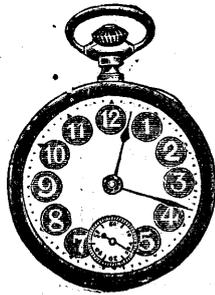
(京橋南傳馬町大西白牡丹)

(一) 大西白牡丹販賣懐中時計(其一)



懐中時計は久しき以前に我國に輸入し、實用品として紳士社會に歓迎されたものであつたが、其一般に傳はつたのは今より二十有餘年前のことで、三井物産株式會社が米國の時計製造會社と特約を結び、白銅側の懐中時計を一個二圓で販賣した爲め、下級社會の人々は進んで買求め、日常所持したのが動機となつて、年一年と其需要を増加したさうだが、數年以來婦人界の交際が漸く盛んになると共に、婦人持の懐中時計が必要を感ずるに至つて新形の品が賞美されて居るから、其最も賣行き多き所を選んで、三つ四つ寫生し春の装ひの内へ加へて紹介したのである。

(二) 大西白牡丹販賣懐中時計(其二)



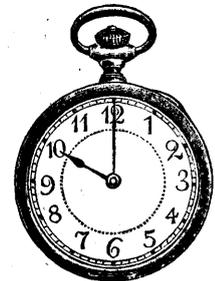
目下の流行は金、銀共總て十形より十二形の間にて儀式其他裝飾用としては、ダイヤモンド其他の寶石を鏤たるもの實用向としては片硝子の薄形もの流行にて、何れも瑞西國ダバン時計會社の製造に係り、犬印と稱へ堅牢の機械中流以上の婦人間の好評を博し、廣く全世界に輸出されて居るさうだ。

(三) 大西白牡丹販賣懐中時計(其三)



六十八圓。
二は九金片硝子文字盤色七寶入、代價十三圓五十錢。
三は十八金梨子地側ダイヤモンド入、代價九十二圓。
四は十八金梨子地片硝子十形、代價二十九圓。

(四) 大西白牡丹販賣懐中時計(其四)

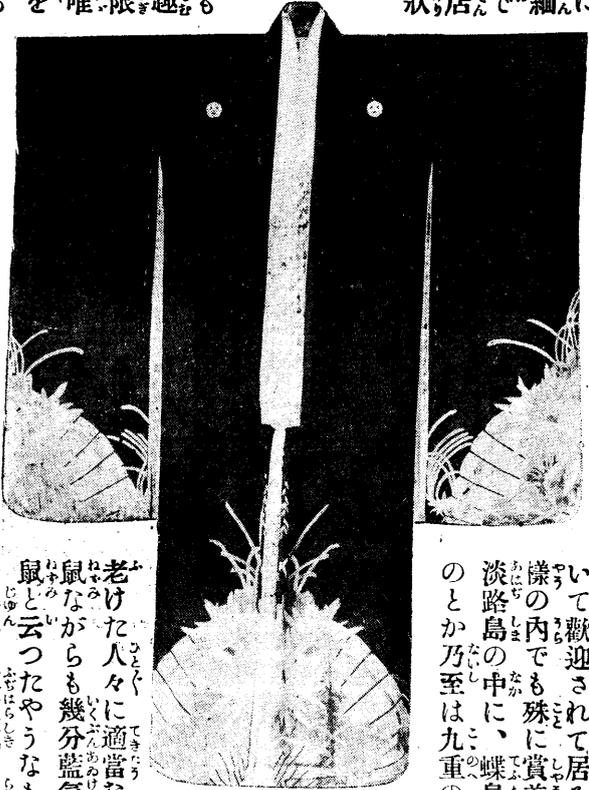


●春の服装

(日本橋通一丁目白木屋吳服店)

▲地質と色合 春の服装に用ゐらるゝ地質は、縮緬と羽二重とであるが、十中の九までは白縮緬で、次に至つては鶉縮緬、敷島縮緬の二種が稍勢力を保つ位で他店は知らず白木屋吳服店の如きは全部縮緬といふ狀況であつたさうだ。夫から色合であるが、之は何處も格段なる相違はないけれど、十八色の好みと吳服店の方にも多少意見もあるの、稍趣きを異にして居ないとも限らない、雖然大勢は鼠で唯之が色本帳に據て其間色を用ひる迄に過ないのである然して其流行色とも云ふ可きものは、鐵色と鼠とを混合した福壽鼠、或は蓬萊鼠と稱され居る極めて高

(一) 白木屋吳服店調製振袖(其一)



尚なる地色であるとのとである。
▲模様 近來は模様が總て派手に傾いて來た。復古代風の藤原模様などは昨年引續いて歡迎されて居るさうだが、其模様の内でも殊に賞美されて居るのは淡路島の中に、蝶鳥をあしらひしものとかな至は九重の雲と云つた工合な頗る品位のある模様が喜ばれて居るのだ。併稍老けた人々には色合、模様等も夫々異るとは記す迄もなく

鼠と云つたやうなもので、模様も夫に準じて藤原式の老梅とか白南天等を白上りに染上たものが最も上品である所から、霜月から師走にかけて註文があつたとのさだ。次に下

襖模様の流行を記すと、衽の下前だけ模様を附ける
 とで、之は坐つた時に鳥渡模様が見えるので、如何
 にも奥床しいはかりでなく甚だ妙味があるものである。

(二) 白木屋呉服店調製振袖(其二)



文藝俱備

▲裾廻し 相變らず地質は縮緬か羽二重の内であるが、其色は成る可く着物の色と同じなのを附るやうになつて居るさうだ。
 ▲胴貫 依然板居るが、近來は縞羽二重を用ひる向が大分あるさうだ。之は瀟洒して居るから着工番が却々いふとので、將來板縞

を壓倒しないとも限らないことである。
 ▲長襦袢 友禪と紋縮緬の無地が用ゐられ居るが、紋縮緬は春の服装として上品な所が大いに歡迎されて居る。然して若き夫人には橙黄色か緑色が最も適當であるさうだ。

▲帯地 丸帯と片側帯とに拘はらず地質は唐織、縞珍、大島唐織、松濤織の類で、地色は白茶、クリム、藍鐵等の色が流行とも云ふ可く、模様は藤原時代の蝶鳥、霞に若松、松葉巴等の淡泊としたものであるが、本年の最新流行としては華壽美御召に藤原模様を現はしたるものである。

▲振袖 少女の服装の最も目に立つのは振袖であるから、其一二を掲げるとした、則ち
 一 は八千代黒地色の上衣、白羽二重の下水、模様は檜扇に白糸の菊。
 二 は地色福壽鼠、模様は香の圖に藤。何れも上流社會より注文を受けたものであるとのと

時計の鎖 (京橋南傳馬町二丁目大西白牡丹)

(一) 大西白牡丹販賣玉繫ぎ短鎖



一 は最近婦人社會に流行しつつある所の玉繫ぎ最上眞珠入の短鎖り、代價金貳拾八圓。

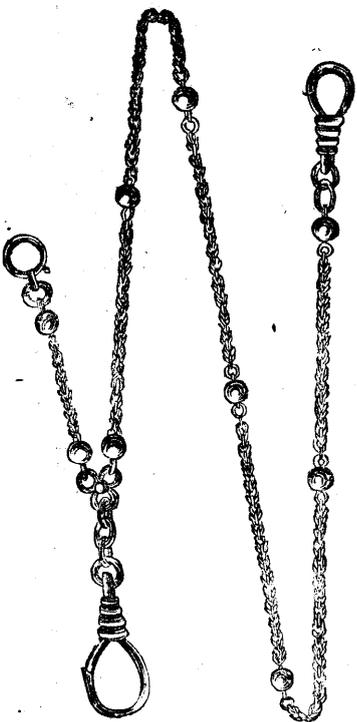


二 は十八金白金交り五本立縹短鎖り、代價貳拾貳圓。

三 は十八金製白金交り八重子持眞珠入の一本鎖り、代價貳拾九圓半。

(三) 大西白牡丹販賣八重子持一本鎖

時計に附屬する所の鎖は糸を編んだもの、金屬を以て製造したもの二種あるが、是は時計と趣きを異にし、外面に現はるゝので、男持の實用向は兎も角、婦人持の時計に用ゆる鎖は裝飾を主としてある結果、十中の八九は金製若くは金に白金を交て製作した優美の品が、令嬢夫人を通じて歡迎せられて居るのは、更めて記す迄もないが、服装と裝飾品其他の裝飾品の嗜好が向上するに伴ひ、最近の流行としては圖に示せる如き眞珠入のもの、白金交りの短鎖が一般に貴婦人間に賞用されて居るとのである。



(一) 松屋呉服店調製大島紬丸帯 (水草)



新 流 行

織、縞珍等は平凡であるとして、最近婦人界に流行し居るものは大島紬、大島御召と粹社會に歓迎されて居る黒縞子地に緑青と金泥で模様を描いたる品よき帯地であるさうだ。

一は大島紬の丸帯、模様は高尚なる水草の寫生、價三十二圓

二は大島御召の片側帯、模様は勅題松上の鶴を現はしたるもの、價六圓九十錢。

(二) 松屋呉服店調製大島御召片側帯 (松上鶴)



婦人は男子と異り如何に立派な衣裳を着飾つても其附屬たる帯が粗末であつたならば、曠の席へ臨むことが出来ないで、帯に大金を投じて新調する向も澤山ある爲め自然其種類は増加するのみであるが、一般に行はれて居る糸錦、唐

◎ 盛装の帯地

(神田今川橋松屋呉服店)

◎ 指環と帶留

(京橋中橋廣小路村松合資會社)

は指環は多数、装身具中最も古き歴史を有するもの。今より百年以前より用ひた位であるが、其最も流行したのは、文化文政の頃で年若き婦人は競つて嵌り居たさうだが、天保十三年水野樓前守閣老となつて、天



品製作製社會資合松村(一)

下の奢侈を嚴禁したので、一時其迹を絶つに至つたが、其後漸く復興して中流以上の婦人と花柳社會の人々の指



(二其)上 同(二)

と寶石珠玉を鑲めたる高貴な品を常用するとなつたのであるが、往昔は銀、水晶の外には殆んどなく、又



(四其)上 同(四)



(三其)上 同(三)

男子で指環を嵌て居るものはなかつたのとまであるから、一般の人々に歡迎さるゝやうになつたのは、



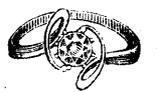
(五其)上 同(五)

明治十年以來で、ダイヤモンド、ルビー、キフキヤ等の寶石入の指環は去る明治二十年七八年



(八其)上 同(八)

の日清戰役以後漸く流行して來たのであるさうだ。



(六其)上 同(六)

一は十八圓の鶴、代價八圓五十錢。二は十八金製白金の交り、龍膽花ダイヤモンド入、代價四百五十圓。三は十八金製の圖、秋草に水の透し肉、代價十八金交り、ダイヤモンド入、代價壹百二十圓。四は白金製のダイヤモンド入、代價五百五十圓。五は十八金製白金の交り、ダイヤモンド入、代價壹百五十圓。六は十八金製白金の交り、ダイヤモンド入、代價壹百五十圓。七は十八金製白金の交り、ダイヤモンド入、代價壹百五十圓。八は十八金製白金の交り、ダイヤモンド入、代價壹百五十圓。



(七其)上 同(七)

